

修士論文（要旨）
2012年7月

大学生における抑うつ的反すうに関する肯定的信念と
自己不一致および自己愛傾向との関連

指導 井上 直子教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
210J4012
山川 亜希子

目次

I. 問題の背景と所在	1
1. 抑うつについて	1
2. 抑うつの反すうについて	1
3. 抑うつの反すうに影響を及ぼす要因— 「抑うつの反すうに関する肯定的信念」について	4
4. 「抑うつの反すうに関する肯定的信念」を活性化する要因— 自己不一致について	6
5. 自己愛について	8
II. 目的	10
III. 方法	11
IV. 結果	15
1. 各尺度の検討	15
2. 各尺度における学年差の検討	21
3. 各尺度における男女差の検討	23
4. 「抑うつの反すうに関する肯定的信念」と各尺度との関連について	24
V. 考察	30
1. 「抑うつの反すうに関する肯定的信念」、「抑うつの反すう」、「自己不一致」、 「自己愛傾向」の関連について（重回帰分析の結果から）	30
2. 「抑うつの反すうに関する肯定的信念」と「抑うつの反すう」の関連	33
3. 「抑うつの反すうに関する肯定的信念」と「自己不一致」の関連	34
4. 「抑うつの反すうに関する肯定的信念」と「自己愛傾向」の関連	34
5. 「抑うつの反すう」と「自己不一致」および「自己愛傾向」の関連	36
6. 学年差について	36
VI. まとめ	37
VII. 今後の課題	37
謝辞	38
引用・参考文献	
資料	

I. 問題と目的

近年、青年期、とりわけ大学生は、うつ病や自殺が多発しやすい時期だといわれているが（坂本，1997）、最近では、大学生においてもうつ病などの診断基準を満たさない抑うつ状態を示す者が増加しているという。抑うつに関して、これまで様々な研究が行われてきているが、近年では、抑うつの発症及び持続に関連のある要因として、「自己の抑うつ気分・症状や、その状態に陥った原因・結果について消極的に（passive）考え続けること」（Nolen-Hoeksema，2004）と定義される「抑うつの反すう」が注目されている。憂うつな気分を感じた時に抑うつの反すうをする人の多くは、抑うつの反すうに対して、肯定的信念をもつとされている。また、Roelofs et al(2007)は、現実の自己と理想の自己の不一致（自己不一致）が大きい人が、この「抑うつの反すうに関する肯定的信念」を高め、抑うつの反すうをしているとされる。日本においては、上記の関連について検討されていないため、本研究では、自己不一致を感じやすいとされる自己愛の概念も含め、「自己不一致」及び「自己愛傾向」が、「抑うつの反すうに関する肯定的信念」及び「抑うつの反すう」にどのような影響を及ぼしているのかについて検討することとした。

II. 方法

調査は、2011年10月5日から12月14日の間に、都内の私立大学生1年生～4年生を対象に質問紙調査を実施した。回答に不備のあったものなどを除き、437名（男性126名、女性311名。1年生131名、2年生126名、3年生97名、4年生83名。18歳～23歳、平均年齢20.01歳、 $SD=1.32$ ）を対象に分析した。使用した尺度は、①自己不一致測定票（小平，2002）、②日本語版反応スタイル尺度（RSQ）の「否定的考え込み」因子（名倉・橋本，1999）、③反すうする理由尺度（RRI）（長谷川・根建，2011）、④自己愛人格尺度（NPS）短縮版（谷，2006）である。

III. 結果と考察

本研究の結果から、男女ともに、「自己不一致」の大きさに関わらず、「自己愛傾向」が「抑うつの反すうに関する肯定的信念」および「抑うつの反すう」と関連があることがわかった。男女ともに、過敏性自己愛に相当する「自己愛性抑うつ」が高いと、「抑うつの反すうに関する肯定的信念」が高まり、「抑うつの反すう」を行う傾向にあることが示された。すなわち、他者から自分が期待した反応が返ってこず、自己愛が傷つき落ち込んだ際に、抑うつの反すうをすることで「自己や状況の洞察」、「不快感情の予防と緩和」、「将来の失敗の回避」、「将来の問題状況への準備」、「共感性の増加」になるという反すうに対する肯定的信念が高まり、抑うつの反すうを行う傾向があることがわかった。また、この関連は、特に男性において強いことが明らかとなった。そのため、特に男性においては「抑うつの反すうに関する肯定的信念」や「抑うつの反すう」に対してアプローチする際、過敏性自己愛の影響に配慮したアプローチが必要であると思われる。

一方、「抑うつの反すうに関する肯定的信念」の高低に関わらず、自己愛の傷つきに敏感であったり、他者に注目・賞賛されたいという欲求が高いと、「抑うつの反すう」を行いやすいということが明らかとなった。また、特に女性においては、自分が才能に恵まれており、他者よりも優れているという強い自己肯定感が高いと、「抑うつの反すう」を行い

くいことがわかった。このことから、女性においては、「抑うつ的反すうに関する肯定的信念」よりも、自己への肯定感を表す「有能感・優越感」を高めることが「抑うつ的反すう」への予防につながることを示唆された。

以上のことから、各変数間において男女差があり、性別によって異なるアプローチが有効であることが示唆された。

引用・参考文献

- Gabbard, G. O. 1994 *Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM-IV edition*. Washington DC: American Psychiatric Press. (館哲朗 (監訳) 1997 精神力動的精神医学 その臨床実践[DSM-IV版] ③臨床編: II 軸障害 岩崎学術出版社)
- 長谷川晃・金築優・井合真海子・根建金男 2011 抑うつ的反すうに関するネガティブな信念と抑うつとの関連性 行動医学研究, 17 (1), 16-24.
- 長谷川晃・根建金男 2011 抑うつ反すうと関連する信念の内容 感情心理学研究, 18 (3), 151-162.
- Higgins, E.T. 1987 Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, 94, 319-340.
- 上地雄一郎・宮下一博 2004 もろい青少年の心—自己愛の障害— 北大路書房
- 小平英志 2002 女子大学生における自己不一致と優越感・有能感、自己嫌悪との関連—理想自己と義務自己の相対的重要性の観点から— 実験社会心理学研究, 41 (2), 165-174.
- 小平英志 2005 個性記述的視点を導入した自己不一致の測定: 簡易版の信頼性, self-esteem との関連の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学, 52, 21-29.
- 松本麻友子 2008 反すうに関する心理学的研究の展望—反すうの軽減に関する要因の検討— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 心理発達科学 55, 145-158.
- 名倉祥文・橋本幸 1999 考え込み型反応スタイルが心理的不適応に及ぼす影響について パーソナリティ研究, 12 (2), 1-11.
- Nolen-Hoeksema, S. 1991 Responses to depression and their effects on the duration of depressive episodes. *Journal of Abnormal Psychology*, 100, 569-582.
- Nolen-Hoeksema, S. 2004 The response styles theory. In C. Papageorgiou & A. Wells (Eds.), *Depressive rumination: Nature, Theory, and treatment*. UK: Jhon Wiley & Sons. Pp.107-123.
- 岡野憲一郎 1998 恥と自己愛の精神分析—対人恐怖から差別論まで— 岩崎学術出版社
- Roelofs, J., Papageorgiou, C., Gerber, R.D., Huibers, M., Peeters, F., & Arntz, A. 2007 On the links between self-discrepancies, rumination, metacognitions, and symptoms of depression in undergraduates. *Behaviour Research and Therapy*, 45, 1295-1305.
- 坂本真士 1997 抑うつと自己注目の社会心理学 東京大学出版会
- Stolorow, R. D. 1975 Toward a functional definition of narcissism. *International Journal of Psychoanalysis*, 56, 179-185.
- 高野慶輔・丹野義彦 2010 反芻に対する肯定的信念と反芻・省察 パーソナリティ研究, 19 (1), 15-24.
- 谷冬彦 2006 自己愛人格尺度 (NPS) 短縮版の作成 日本教育心理学会第 48 回総会発表論文集, 409.